

新羅義寂撰『無量寿経述記』の撰述年代考

南 宏 信

はじめに

『無量寿経述記』とは、康僧鎧訳『無量寿経』を新羅僧義寂が注釈したものである。義寂は主に浄影寺慧遠（五二三〜五九二）・吉蔵（五四九〜六二三）によって注釈しており、特に四十八願の解釈は慧遠の説を踏襲しながら四十八願と『往生論』の二十九種莊嚴を対比させている。義寂は元暁（六一七〜六八六）・法位（七世紀）など同時代の新羅僧とは違い、本願の念仏、口称の念仏を強調し、善導（六一三〜六八一）『往生礼讃偈』、懷感（七世紀）『釈浄土群疑論』に立脚する。¹⁾ この『無量寿経述記』の内容は、かつて源隆国（二〇〇四〜一〇七七）『安養集』等から逸文を蒐集して作成された「復元本」によってのみ知ることができる。作成者は恵谷隆戒氏。現存本は今まで確認されておらず、恵谷氏が作成してから三十年以上、この「復元本」（以下、恵谷復元本）が唯一の資料として知られてきた。そのような状況下において、身延文庫から『無量寿経述記』巻一の断簡（以下、身延文庫本）が見出された。

一、身延文庫本について

山梨県に在る日蓮宗総本山久遠寺内に設立される身延文庫創建の起源は、日蓮（一二三二—一二八二）にまで遡り、歴代法主が著述・蒐集した典籍・文書・絵画・工芸品等を蔵している。²近年その蔵書目録が公開され、当該目録の「余宗の部」には著者未記載で「無量寿経述記」の書名を載録している。³検討の結果、該本が新羅僧義寂の撰述した『無量寿経述記』の巻第一（断簡）であることが判明し、概要はすでに報告した通りである。⁴断簡ではあるものの、現存本が確認できたことの意義は大きい。

新知見として、以下のことが挙げられる。一部分ではあるが恵谷復元本では知ることが不可能であった科段を知ることができた。かつて恵谷氏は義寂の著作を整理する中で『華嚴経』の名を有する注釈書を確認できないことをもって、

義湘の門人で、華嚴の学系を継承している筈の彼とは考えられないほど、華嚴系の思想の希薄さが目立つように思われる。⁵

というが、身延文庫本の科段は『華嚴経』に沿って構成されていることから、注釈の背景には『華嚴経』の存在を見ることが出来る。海東華嚴の祖義湘（六二五—七〇二）の弟子としての義寂の立場は確かなものであり、今後さらに精査することで恵谷氏の疑問は解消できよう。

また恵谷復元本は淨影の名を一箇所挙げるが、身延文庫本に依る限りそれは誤りであり、『無量寿経述記』では淨影を直接引用していないと判断できる。他にも『無量寿経述記』の文章として抽出した記述が、確かに『無量寿経述記』からの引用であるが、義寂自身の文章ではなく義寂が經典から引用した箇所である場合も確認した。このように身延文庫本で確認できる本文内容が増えた事により、部分的ではあるが、恵谷復元本の検証が可能となった。身延文庫本を更に解読することで一層の究明が可能となろう。

二、新羅浄土教の二系譜と義寂の生存年代

義寂の生涯は知られておらず、僅かな記述と諸目録にみる著作名や現存の著作、他の人物・著作との比較によって推測する他はない。生没年に関しては、望月信亨氏や富貴原章信氏が言及する所によれば二つの記述を確認できる。まず高麗の一然(一二〇六—一二八九)の編纂した『三國遺事』四卷「義湘伝」に言う。

徒弟悟眞。智通。表訓。眞定。眞藏。道融。良圓。相源。能仁。義寂等十大徳爲領首。皆亞聖也。各有傳。

(徒弟の悟眞・智通・表訓・眞定・眞藏・道融・良圓・相源・能仁・義寂等の十大徳を領首となす。皆、亞聖なり。各々傳あり。)

海東華嚴の祖義湘の十大弟子の一人に名をあげる。「各々伝あり」とあるが、悟眞・智通・表訓について少しく触れる程度で義寂の事跡についての記述はない。

二つは本邦の玄昉(？—七四六)の弟子善珠(七三—七九七)『唯識義燈增明記』卷一が引用する道証(六四〇—七一〇)『唯識論要集』である。

要集六卷總奇六家語、共演一部之文。一者有說。基法師也、二者有釋。圓法也、三有鈔光法、四者有解圓法也、五有云圓法、

六未詳決教法師也⑩

〔要集〕六卷、總じて六家の語に寄りて、共に一部の文を演ぶ。一には有るが説く(基法師なり)。二には有るが釋す(測法師なり)。三には有るが鈔す(光法師)。四には有るが解す(觀法師なり)。五には有るが云く(觀法師)。六には未詳決(寂法師なり)。

惠谷氏は新羅淨土教の系譜を考える場合に、二つの系譜を提示している。⑪ 一つは淨影寺慧遠の系統、⑫ 今一つは玄奘(六〇二—六六四)・基(六三一—六八二)の系統⑬である。氏は前述の記述と惠谷復元本の内容等を踏まえて、義寂を慧遠の影響下にあり、皇竜寺の系譜に位置付けて「七世紀中葉より八世紀の初葉に在世していたものと見ねばならない」と推測する。⑭ 図示すると文末に提示した表の通り。

この後惠谷氏の見解に対して、深貝慈孝氏は次のような問題を呈する。

新羅淨土教の上において二つの流れが認められるのは、慧遠の淨土教に関する二つの書すなわち『無量壽經義疏』と『觀無量壽經義疏』が、いち早く新羅に伝えられたとすることによるものであって、元暁、法位、義寂、玄

一などの浄土教関係釈書の中に、慧遠の浄土思想がうけつがれているとするものである。そして玄奘系に属する憬興の『無量寿経連義述文贊』には、慧遠をはじめとして、その系統に属する諸師の説が破折されているところから、慧遠の系統に対して、玄奘の系統の浄土教が立てられるにいたったというのが、前後の事情であろうと思われる。全体として明快な論旨であるから、付け加えるべきことはないのであるが、個別に検討を加えると、種々の問題も出てくるようである。¹⁵⁾

とし、法位に焦点を絞って考察を進める。その結果、「新羅浄土教の上において、慧遠系に対する唯識系をもってするのは、少しく安易に過ぎるという感がある」とし、法位の浄土思想については、

恐らく法位は、玄奘が翻訳した新来の『仏地経論』に、唯識に基いた浄土が説かれていることを知り、全面的に受け容れて『無量寿経』を解釈したのであろう。このことから法位は唯識家に属し、浄土思想においても完全に唯識系であって、その意味からは玄奘系に属する人物であったとしなければならぬであろう。

という。義寂の場合を見るに、道証の説によれば、義寂は唯識六家に数えられ、さらに欠本ながら『唯識未詳決』や『成唯識論別抄』なる書名も確認でき、そして『無量寿経述記』の中では玄奘訳の經典を引用しているので、玄奘の門下にいたかは別としても、唯識思想の影響を受けていると予想される。よって義湘の高弟であり、憬興に批判されることのみを以て慧遠の系統に位置付けることについては、やはり深貝氏の指摘通り再考の余地が残されているであ

ろう。加えて今は身延文庫本の存在もある。

身延文庫本は、大半が経論からの引用で構成されおり、義寂自身の文は僅少である。恵谷復元本でも相当数の引用文献が確認されている。およそ経典の注釈書・著述は、概ね二重の役割によって構成されている。一つは釈迦の金言である経典を引用することで、自身の論証を補強する役割である。もう一つは選者が本来独立した文脈と、成立背景を持ってゐる經典群から個別に文言を抽出して、それらを再構成することで選者自身の主張へと変換する役割である。よって引用文献を考察することで、一方では原典解明へと繋がり、もう一方では著作の背後に潜む選者の撰述意図、状況が見えてくるであろう。まずは『無量寿経述記』の引用文献を検討することで本書の撰述年代を考察することが本稿の目論みである。

三、『無量寿経述記』の引用経論

恵谷復元本が列挙した引用経論は以下の通りである。

初めに本書復元本によって、本書の中に引用している経論章疏名を記してみれば次の如くである。往生論（一七）・清浄覚経（一二）・観経（九）・華嚴経（七）・悲華経（七）・長房録（四）・智度論（三）・般若経（三）・観音授記（三）・唐録・道慧宋齐録・普曜経・起信論・大阿弥陀经・仏地論・称讚浄土経・阿弥陀经・集異門論・瑜伽論・瓔珞本業经・楼炭经（各二回）・法宝唱録・本起经・群疑論・弥勒問经・十往生经・後出阿弥陀偈・上生疏・施設論・十地論・仏性論・宝性論・撰論・鼓音声陀羅尼经・往生礼讚・最勝天王般若经・十行经・梵網经・字書・

これらは、個々に成立の問題があるもの、また早くに欠本になっていて内容を確認できないもの、「唐録」のように省略されていて出典が不明なものもあるが、玄奘の新訳經典以前には既に成立していたと思われる。

身延文庫本で確認できた引用経論は、すでに恵谷氏が列挙する『修行本起經』『普曜經』『華嚴經』『大智度論』『瑜伽師地論』があり、新たに『阿毘達磨順正理論』『大般涅槃經』¹⁷、『文殊師利問經』¹⁸を確認した。それぞれ一度に引用する分量に増減があるので、どの経論を重要視していたかを知るには、内容や文脈の検討も必要であるが、引用状況を見る一つの目安となろう。以下具体的に経論を検討して撰述年代を考察する。

三十一、最勝天王般若經

まず義寂が「如_シ最勝天王般若經_ニ説_ク」として一度あげる『最勝天王般若經』について検討する。恵谷復元本の出典は了慧（一二四三—一三三〇）『無量寿経鈔』巻六である。『無量寿経』の「具諸辨才除滅衆生煩惱之患（諸の辨才を具して衆生煩惱の患を除滅する）」を註釈する箇所である。以下の通り。

次_ノ文_ノ中_ニ辯才_等ト者、四無礙辯。又義寂_ニ云。則能_ク具_ス足_ス八九種_ノ辯。言_ハ八辯_ト者、謂_フ、「不嘶喝辯」。遠_ク離_レ大衆威徳_ノ畏_ル故。不迷亂辯。堅住明了_ニ不_ニ怯弱_ト故。不怖畏辯。菩薩處_レ衆_ニ如_シ師子王_ノ無_ク恐懼_ノ故。

新羅義寂撰「無量壽經述記」の撰述年代考（南）

「不憍慢辯」。離^ル煩惱^ヲ故^ニ。」「義具足辯」。不^レ說^カ無義^ヲ契^フ法相^ニ故^ニ。」「味具足辯」。善^ク解^シ書論^ヲ、知^ル文字^ヲ故^ニ。」「不拙濫辯」。多劫^ニ積^ム集^ム巧便語^ヲ故^ニ。」「應時分辯」。善^ク順^ズ三時^ニ。謂^フ熱雨寒^ノ說^無差亂^ニ。亦順^ズ三分^ニ。謂^フ初中後^ノ說^不交雜^ト。由^ル斯^ニ故^ニ說^レ辯^ト。應^レ時^ニ分^テ此^ノ八^ヲ、名^ヲ爲^ス清淨辯^ト也。言^フ九辯^ト者、謂^フ「無著辯、無盡辯、相續辯、不斷辯、不怯弱辯、不驚怖辯、不共餘辯、無邊際辯、一切天人所愛重辯」。此^ノ九^ヲ名^ヲ爲^ス無礙辯^ト也。如^シ最勝天王般若經^ニ說^カ。⁽¹⁹⁾

（句読点等は筆者による）

この『最勝天王般若經』は現存しないが、『開元釈教録』に二度その名を見出すことができる。一つは「大乘別生經」の中で、

最勝天王般若經八卷（亦云。新譯勝天王般若、是大般若第六會新編上。）⁽²⁰⁾

最勝天王般若經八卷（亦た云く。新譯の勝天王般若は、是れ大般若第六會なり。新しく上に編ず。

という。もう一つは以下の通り。

最勝天王般若經八卷（亦云。新譯勝天王般若）

右一經、即大般若第六會。與舊勝天王般若同本異譯。⁽²¹⁾

最勝天王般若經八卷（亦た云く。新譯の勝天王般若なり。）

右一經は、即ち大般若第六會なり。舊の勝天王般若と同本異譯なり。

「奮勝天王般若」とは陳の月婆首那が五六五年に訳した『勝天王般若若波羅蜜經』を指す。²²そして『最勝天王般若經』を『大般若波羅蜜多經』第六會であるという。当該箇所は以下の通り。

月婆首那譯『勝天王般若波羅蜜經』

大王。菩薩摩訶薩行般若波羅蜜得無礙辯才。所謂無著辯才。無盡辯才。相續辯才。不斷辯才。不怯弱辯才。不驚怖辯才。不共辯才。天人所重辯才。無邊辯才。菩薩摩訶薩行般若波羅蜜得清淨辯才。所謂不嘶喝辯才。不迷亂辯才。不怖畏辯才。不高慢辯才。義具足辯才。味具足辯才。不拙澁辯才。應時節辯才。²³

玄奘譯『大般若波羅蜜經』（『最勝天王般若經』）

天王當知。諸菩薩摩訶薩行深般若波羅蜜多得無礙辯。謂若無著辯。若無盡辯。若相續辯。若不斷辯。不怯弱辯。不驚怖辯。不共餘辯。無邊際辯。一切天人所愛重辯。天王當知。諸菩薩摩訶薩行深般若波羅蜜多得清淨辯。謂不嘶喝辯。不迷亂辯。不怖畏辯。不憍慢辯。義具足辯。味具足辯。不拙澁辯。應時分辯。²⁴

『勝天王般若波羅蜜經』と『大般若波羅蜜多經』はほぼ同文で「無礙弁」から「清淨弁」へと説明する。では義寂

はどちらを引用しているのだろうか。恵谷復元本、つまり義寂引用の「最勝天王般若経」は「清浄弁」から「無礙弁」へと逆の順序で説明する。また義寂の注釈と見られる文章も混ざっており、忠実な引用ではない。そこで八、九種の弁才の名称のみを比較すると以下の通り。

『勝天王般若波羅蜜経』 『大般若波羅蜜多経』 義寂引用『最勝天王般若経』

無礙弁才（九種）

①無著弁才

無著弁

無著弁

②無尽弁才

無尽弁

無尽弁

③相統弁才

相統弁

相統弁

④不断弁才

不断弁

不断弁

⑤不怯弱弁才

不怯弱弁

不怯弱弁

⑥不驚怖弁才

不驚怖弁

不驚怖弁

⑦不共弁才

不共余弁

不共余弁

⑧天人所重弁才

無辺際弁

無辺際弁

⑨無辺弁才

一切天人所愛重弁

一切天人所愛重弁

清浄弁才（八種）

①不嘶喝弁才

不嘶喝弁

不嘶喝弁

- | | | |
|---------|------|------|
| ② 不迷乱弁才 | 不迷乱弁 | 不迷乱弁 |
| ③ 不怖畏弁才 | 不怖畏弁 | 不怖畏弁 |
| ④ 不高慢弁才 | 不憍慢弁 | 不憍慢弁 |
| ⑤ 義具足弁才 | 義具足弁 | 義具足弁 |
| ⑥ 味具足弁才 | 味具足弁 | 味具足弁 |
| ⑦ 不拙洪弁才 | 不拙洪弁 | 不拙洪弁 |
| ⑧ 応時節弁才 | 応時分弁 | 応時分弁 |

『大般若波羅蜜多經』と義寂所引『最勝天王般若經』は全く一致するが、『勝天王般若波羅蜜經』は「才」を付すなど形式的な相違があり、また名称の相違も五箇所確認できる。『大般若波羅蜜多經』と別生經『最勝天王般若經』との成立の前後関係は不明ながらも、これにより『最勝天王般若經』は、『開元釈教録』の記述通り、確かに『大般若波羅蜜多經』と同本であって、玄奘訳であるといえる。『大般若波羅蜜多經』は顯慶五（六六〇）年正月一日から竜朔三（六六三）年十月二十日の約四年間に翻訳されているので、『最勝天王般若經』もこの期間に成立しているであろう。

三二二、玄奘訳

惠谷復元本で「般若經」は三回確認できる。一つは鳩摩羅什訳の『摩訶般若波羅蜜經』である。²⁵後の二つは引用の

形式が趣意のため、また短文であるために特定には至っていない。⁽²⁶⁾しかし前項で義叔は玄奘訳『大般若波羅蜜多経』の別生経「最勝天王般若経」を引用していることを確認している。義叔が引用する玄奘訳に『大般若波羅蜜多経』も加えて訳出年代順に挙げると以下の通り。⁽²⁷⁾

『瑜伽師地論』貞観二十二(六四八)年五月十五日

『撰大乘論』世親・無性共に貞観二十三(六四九)年六月十七日

『仏地経論』貞観二十三(六四九)年十一月二十四日

『称讚浄土仏撰受経』永徽元(六五〇)年正月一日

『阿毘達磨順正理論』永徽五(六五四)年七月十日

『阿毘達磨大毘婆沙論』⁽²⁸⁾ 顕慶四(六五九)年七月三日

『成唯識論』顕慶四(六五九)年閏十月

『大般若波羅蜜多経』竜朔三(六六三)年十月二十日

整理の限り、玄奘訳の唯識関係の著作を引用することから『無量寿経述記』の撰述年代は、玄奘が長安に戻った六四五年以降、具体的には『大般若波羅蜜多経』訳出の六六三年以降であることが推測できる。

三一三、弥勒問經

『弥勒問經』は『無量寿經述記』中巻に一度のみ引用される。この『弥勒問經』の引文は、阿弥陀仏の第十八願の「十念」を注釈する中で引用される。この引文は恵谷氏がいうように、智儼（六〇二〜六六八）の『華嚴経内章門等雜孔目章』巻四が「六念章」の箇所で「復有十念」とし、典拠を示さずに同内容を述べるほか、元暁の『両卷無量寿經宗要』が「弥勒発問經」、竜興（七世紀頃）の『観無量寿經記』が「弥勒問經」、懐感の『釈浄土群疑論』巻五が「弥勒所問經」として引用する。他には、道世（〜六八三）の『法苑珠林』が「弥勒発問經」、「毘尼討要」が「弥勒菩薩発問經」、新羅法位（七世紀頃）が『無量寿経義疏』で「弥勒問經」、新羅玄一（七世紀頃）『無量寿経記』が「弥勒所問經」、「遊心安楽道」が「弥勒発問經」として同文を引用する。³⁹

これを見るに「弥勒問經」の他に「弥勒菩薩発問經」「弥勒発問經」「弥勒所問經」の名を見出す。本経は「弥勒菩薩所問本願經」とは別経で現存せず、また目録にも載録されておらず、僅かな引用と経名を確認するのみである。恵谷氏は「彼（義寂）の引用する「弥勒問經」の慈等十念の文章は、唐の智儼の「華嚴孔目章」に記す文章と同文である」ということは、彼が師の義湘を通じて智儼の説を引用したと考えられる³⁰という。智儼から義湘、そして義寂へと直接繋がるかどうかは確認できないが、³¹いずれも唐代の僧が『無量寿経述記』と同じ箇所を引くことは興味深い。

三一四、実叉難陀訳

二つの經典に注目して見る。一つは『華嚴経』であり、二つには『大乘起信論』である。『華嚴経』の場合、身延

文庫本と恵谷復元本は共に『六十華嚴』からの引用で、六九九年に訳出される実叉難陀訳『八十華嚴』を引用しない。また『大乘起信論』は真諦訳（五五四年）と実叉難陀訳（七〇〇年）があり、『無量壽經述記』は真諦訳を引用する。実叉難陀訳を使用しないのは『華嚴經』の場合と同じである。これにより義寂は意図的に実叉難陀訳を使用しなかったというよりは、そもそも実叉難陀訳を知る状況ではなかったのではないだろうか。

三一五、普曜經

本經は三七五年の訳出である。異訳の一つに地婆訶羅訳『方广大莊嚴經』十二卷があり、六八三年の訳出である。『方广大莊嚴經』は、『普曜經』から約三百年、大乘思想の上に立脚する仏伝である。「下化衆生の為の、方便示現の応身仏としての立脚地より見たる仏伝」である。常盤大定氏は、『方广大莊嚴經』における後世の影響として、

更に注意すべきは、大梵天王勸請品に、上中下の三根を邪定・正定・不定の三聚に分けた考が見らるゝことである。（中略）三聚の思想は、智度論に出で、其の後瑜伽唯識系統の佛教中に入つて、五性格別思想の證權とせられ、特に邪定聚が、無性有情思想を表はしたものととして、頗る重要な意義を有するに至り、修道上の大問題となつたのであるが、三聚の考が明瞭に本經中に説かれてゐることは、大いに興味ある事といはねばならぬ。²³

という。義寂は華嚴の師であると共に、法相の師と伝えられ、目録には『唯識未詳決』や『成唯識論別抄』の書名も確認される。もし義寂が唯識思想の影響下にあるのであれば、『普曜經』に加えて『方广大莊嚴經』も引用したので

はなかるうか。義寂より少し後の新羅僧憬興が『無量寿経連義述文贊』において『方广大莊嚴経』を多用することは対照的である。³⁴⁾

四、撰述年代考

以上『無量寿経述記』の引用経論から推測するに、撰述の上限は『大般若波羅蜜多経』訳出の六六三年であり、下限は『方广大莊嚴経』訳出の六八三年の二十年の期間となるが、推測の域を超えるものではない。それは『方广大莊嚴経』等はすでに訳出されており、義寂は披閲したにもかかわらず、意図的に採用しなかった可能性もあるからである。先ほど「そもそも実叉難陀訳を知る状況ではなかった」と言及したが、そのことに関連して、意図的に採用しなかった可能性を退けたい。論点は、義寂が義湘の弟子であることである。

一つには、義寂の師義湘は六六一年に入唐し、六七一年に智儼の下から新羅に帰国している。まさに玄奘の訳事業隆盛期に唐長安に身を置いていたことになる。義湘の帰国時点において『無量寿経述記』引用の文献は全て訳出されている。義寂が義湘帰国後の弟子だとして、全て新羅で入手可能な状況である。³⁵⁾『弥勒問経』も惠谷氏が言うように、義湘の帰国間もなく元曉・義寂に伝えられたとしても時間的に問題はない。一方、実叉難陀訳の『八十華嚴』と『大乘起信論』、そして『方广大莊嚴経』はまだ訳出されていないので見ることは不可能である。

二つには、惠谷氏は道証『唯識論要集』の記述について、「彼（義寂）が入唐して玄奘について唯識を学んだとしているけれども、その点は明瞭ではない」という。確認した通り義寂は義湘の弟子であるとともに、『唯識未詳決』や『成唯識論別抄』を著していることから、玄奘の唯識思想の影響下にもあると予想される。確かに入唐して玄奘の

門下にいたとしても不思議ではない。しかし二人とも同時期の長安滞在中に、一方は智儼の下に、一方は玄奘門下に身を置きながら、義寂が義湘の弟子になるだろうか。義寂について確認できる第一資料は既述の通り『三国遺事』巻四の記載であり、そこに述べる義湘の「十大徳」の一人であることが第一の基準となる。仮に長安で弟子になっていたとしても、師の義湘が帰国する際には義寂も帰国したであろう。そうだとするとやはり帰国時点で実又難陀訳の『八十華嚴』と『大乘起信論』、そして『方広大莊嚴經』は訳出されていないので、見ることは不可能である。

おわりに

以上のことから、『無量壽經述記』の撰述年代は、撰述地が長安の場合には『大般若波羅蜜多經』訳出の六六三年から『方広大莊嚴經』訳出前後の約二十年の期間となり、撰述地が新羅の場合には更に八年絞ることが可能となり、義湘帰国の六七一年以降から『方広大莊嚴經』訳出の六八三年前後の約十年の期間であるとひとまず結論づけられよう。この期間は恵谷氏の推測した義寂の生没年代の範囲内であり、他に引用される基（『観弥勒上生兜率天経贊』、善導（『往生礼讃偈』）、懐感（『釈浄土群疑論』）の年代とも一致する。

さて、出典が判明している引用経論から撰述年代を考察を加えて一応の結論を提示した。しかし撰述年代の考察をする上において、身延文庫本に興味深い一文が確認できるので、最後に言及しておく。それは以下の一文である。

「世尊」者謂「能永錫夷四魔畏故」。（假三六丁ウ）

この文は『無量寿経』「爾時世尊諸根悦予」の「世尊」を注釈する箇所である。この「能永蠲夷四魔畏故（能く永く四魔の畏れを蠲き夷らかにするが故に）」は出典を挙げてはいないが『金剛般若波羅蜜經破取著不壞假名論』巻上の以下の文と一致する。

此中世尊者。謂何能永蠲夷四魔畏故⁽²⁷⁾

本経は『大周刊定衆経目錄』巻六には、

金剛般若波羅蜜經破取著不壞假名論一部二卷⁽²⁸⁾

右大唐永淳二年九月十五日三藏地婆訶羅。於西京西太原寺歸寧院譯。新編入錄⁽²⁹⁾。

とあり、『開元釈経録』にも、

金剛般若波羅蜜經破取著不壞假名論二卷

功德傳音傳亦云功德論見大目録
淳二年九月十五日於西太原寺歸寧院譯

という。これらによれば『功德施論』とも呼称される本経は、『方廣大莊嚴経』（六八五年訳出）の訳者でもある地婆

新羅義寂撰『無量寿経述記』の撰述年代考（南）

訶羅(六七九—六八八)が永淳二年(六八三)に翻訳したものである。もし身延文庫本のこの一文が『金剛般若波羅蜜経破取著不壞假名論』からの引用だとすれば、『無量寿経述記』の撰述年は『金剛般若波羅蜜経破取著不壞假名論』訳出の六八三年より以後で、『方広大莊嚴経』訳出の六八五年より以前の二年前後の期間となる。

これまでの考察から、義寂は玄奘訳の経論に加え、地婆訶羅訳の経典、つまり新訳経論を積極的に引用していることが特徴と言える。この傾向は玄奘以降の新羅浄土教文献に共通しており、例えば既に言及した様に義寂より少し後の新羅僧憬興が『無量寿経連義述文贊』中において、従来の仏伝ではなく、新訳『方広大莊嚴経』のみを多用することがあげられる。新訳経論に比較的早い期間に触れることができる地理的状况、かつそれらを積極的に受容する新羅浄土教の傾向の中では、新訳の『方広大莊嚴経』を披閲したにも関わらず、あえて引用しなかったという想定を立てるよりは、『方広大莊嚴経』が未だ訳出されていなかったとするほうが妥当ではないだろうか。

この推測を敷衍して義寂の生没年代を類推することが可能であるが、論じ残した課題もある。その原因は本稿の考察領域を身延文庫本と恵谷復元本との引用経論のみに限定したことにある。今後本文内容を具体的に精査することによって、例えば『無量寿経述記』における唯識の影響や、『華嚴経』の影響を考察する必要がある。その上で現存する他の著作、つまり『法華経論述記』、『梵網経菩薩戒本疏』も含めた複眼的考察へと展開していくことが可能となる⁶⁾。

【付記】執筆にあたり、身延文庫の吉村明悦文庫長、渡邊永祥主事に閲覧の機会を賜りました。また掲載にあたっては身延山大学の福士慈稔教授にご高配賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

惠谷氏が説く新羅浄土教の二系統

①【慧遠の系統】

●皇竜寺系

地論・唯識・攝論の字者

曇遷 (542 ~ 607) — 慧遠 (523 ~ 592)

円光 (532 ~ 630)
慶州皇竜寺。幼年長安へ。

法常 (567 ~ 645)
「成実・思禪・羅殿・地論・攝論」の撰成者。四種浄土思想。師弟關係

慈蔵 (608 ~ 686)
皇竜寺住僧。名望を慕って受戒。桓国時に大藏經を持ち帰る。

智儼 (602 ~ 668)
華嚴宗2祖

法蔵 (643 ~ 712)
華嚴宗3祖

同朋
 義相 (620 ~ 702)
皇竜寺。

元曉 (617 ~ 686)
浄影寺慧遠を繼承。皇竜寺。

義寂 (7世紀中頃 ~ 8世紀初頃)
著作に「唯識未詳決・成唯識論別抄」あり。

●法位・玄一系

浄影寺慧遠の説に依る。

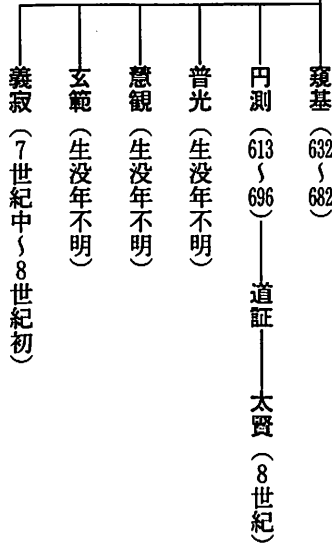
法位 (7世紀頃) — 玄一 (7世紀頃)
法位の説に依る。

新羅義寂撰「無量寿経述記」の撰述年代考 (南)

②【玄奘・慈恩の唯識浄土教の系譜】

善珠(723～797)『唯識義灯増明記』卷一が引用する道証(640～710)『唯識論要集』

玄奘(602～664)



・淨影寺遺蹟・法位を改斥。
・慧観の説を批評。

憬興(7世紀中～8世紀初)

・『四分律疏』二卷(次)

・『法苑珠林』二十四卷第三十二節。

遁倫(伝歴不明)

- (1) 「浄土教典籍目録」(仏教大学総合研究所、二〇一二年)所収の山中行雄稿「無量寿経述義記」の項目。
- (2) 室住一妙著「身延文庫略沿革」(身延文庫、一九四一年)、江利山義顕稿「身延文庫に就いて」(「身延山と私」所収、一九七一年)、林是晉著「身延山久遠寺史研究」(平楽寺書店、一九九三年)。「身延山の自然と文化財」、拙稿「文庫紹介身延文庫」(「いとくら」八、二〇一三年)。
- (3) 身延文庫典籍目録編纂委員会編集「身延文庫典籍目録」(上中下巻、二〇〇三〜五年)。
- (4) 拙稿「新出 義寂撰『無量寿経述記』写本の検討」(『불교학리뷰』(仏教学レビュー)七、金剛大学校〈韓国〉二〇一〇年)。後「古代 동아시아 불교 문헌의 새로운 발견」(古代東アジア仏教文献の新発見)〈도서출판 씨아이알〉(圖書出版 CIL)、二〇一〇年)に収録。
- (5) 恵谷隆戒著「浄土教の新研究」第七章 新羅義寂の無量寿経述義記について(山喜房仏書林、一九七六年)。
- (6) 望月信亨稿「新羅義寂の著書并に『無量寿経疏』」(「浄土学」二二、一九四六年)。
- (7) 富貴原章信著「日本唯識思想史」七三頁〜(大雅堂、一九四四年)。
- (8) 「大正蔵」四九卷一〇七頁一七行。
- (9) 「国訳一切経 史伝部」一〇、五一七頁(一九六七年、一九九五年改訂三刷)。義寂について「国訳」の注には「義湘の弟子は宋高僧傳四、によれば「堂に登り奥を視る者は智通・表訓・梵體・道身等の數人」といひ、崔致遠の法藏和尚伝には「眞定・相圓・亮元・表訓」の四英を數へ、ここにては十大徳を數ふ」とある。
- (10) 「大正蔵」六五卷三四二頁上段二三行。
- (11) 恵谷隆戒著「浄土教の新研究」第五章 新羅法位の無量寿経義疏の研究(山喜房仏書林、一九七六年)。
- (12) 皇竜寺系の慈蔵・元暎・義湘・義寂に法位・玄一をあげる。
- (13) 円測・道証・太賢・憬興・遵倫をあげる。
- (14) 前掲恵谷著「第七章 新羅義寂の無量寿経述義記について」九五頁。
- (15) 深貝慈孝稿「新羅法位浄土教の研究」(戸松啓真教授古稀記念論集 浄土教論集)一九八七年、後「中国浄土教と浄土宗学の研究」思文閣出版、二〇〇二年に所収)。

新羅義寂撰「無量寿経述記」の撰述年代考(南)

- (16) 前掲惠谷著「第七章 新羅義寂の無量寿経述義記について」九八頁。
- (17) 北涼曇無讖(三八五—四三三)訳。
- (18) 梁の僧伽婆羅訳。
- (19) 「浄土宗全書」一四卷一八二頁上段一七行。ここで「由_レ斯_レ故_レ説_レ辯_ト。應_レ時_ニ分_ニ此_ノ八_ヲ、名_ヲ爲_ス清淨辯_ト也。」の訓点に
関して私見を述べておく。ここは本来八種の弁才について述べた後であるので、総括として「此_ノ八_ヲ、名_ヲ爲_ス清淨辯_ト也」と説
むべきであろう。これは九種の弁才を述べた直後に「此_ノ九_ヲ、名_ヲ爲_ス無礙辯_ト也」と訓点を付していることから推測可能であ
る。よって前部の「由_レ斯_レ故_レ説_レ辯_ト。應_レ時_ニ分_ニ」の箇所は第八「應時分辯」を説明しているもので、「由_レ斯_レ故_レ、説_レ辯_ト、應_レ
時分_ニ」と訓じると文脈上問題ないように思われる。詳細は諸本を比較検討しなければならぬが、今は本論と直接関係なく、
また私見との混同を防ぐために「浄土宗全書」の通り引用しておく。
- (20) 「大正蔵」五五卷六五一頁上段二七行。恣意に句読点を付した。
- (21) 「大正蔵」五五卷六六二頁下段六行。恣意に句読点を付した。
- (22) 「大藏経全解説大事典」(雄山閣、一九九八年)。积経論部五下。
- (23) 「大正蔵」八卷六九三頁上段九行。
- (24) 「大正蔵」七卷九二八頁中段二二行。
- (25) 「大正蔵」八卷二五八頁中段六行。前掲惠谷著「義寂の無量寿経述義記復元について」四二四頁七行。
- (26) 前掲惠谷著「義寂の無量寿経述義記復元について」四四九頁一六行。
- (27) 經典名の下に示したのは訳出年代であり、「開元釈経録」卷八(「大正蔵」五五卷五五五頁中段二八行)が記す訳出年代を
あげた。また米田雄介稿「聖語蔵経卷と玄奘三蔵」(『正倉院紀要』三三、二〇〇一年)の表も参照した。
- (28) 引文を確認したところ、復元本が挙げる「集異門論」と「施設論」はそれ自体からの引用ではなく、「阿毘達磨大毘婆沙論」
の引文中に含むものであった。
- (29) CBETA2011を使用。
- (30) 前掲惠谷著「第七章 新羅義寂の無量寿経述義記について」。
- (31) 「遊心安楽道」はその大半を元暁の『両卷無量寿経宗要』から引用することなどから、元暁の著作ではないとされる。撰述地

や撰述者の問題は諸説あり、愛宕邦康著『遊心安樂道』と日本仏教』（法蔵館、二〇〇六年）に諸説がまとめられており、愛宕氏自身は実質的な撰述者として日本の八世紀の東大寺華嚴宗僧の智暲（生没年不明）だとする。

(32) 『国訳一切経』本縁部九、常盤大定「方広大莊嚴経解題」（大東出版、一九三二年）。

(33) 前掲常盤大定稿「方広大莊嚴経解題」。

(34) 金亮淳稿「無量寿経連義述文贊」の思想的特徴―引用文献の分析を中心として（『東アジア仏教研究』八、二〇一〇年）。金氏は暲興の生没年を六二〇年頃から七〇〇年前後に没したと推測している。また『無量寿経連義述文贊』における『方広大莊嚴経』の引用は最多の一―五回を数える。

(35) 例えば金相鉉稿「瑜伽師地論」の傳來と新羅佛教」（『東アジア佛教研究』八、二〇一〇年）では、『瑜伽師地論』の新羅傳來を玄奘翻譯出の翌年、六四九年頃と推測している。これによれば翻譯から新羅に傳播するまで時間的隔たりは殆どない。

(36) 『大正藏』一二卷二六六頁中段七行。

(37) 『大正藏』二五卷八八七中段二行。

(38) 『大正藏』五五卷四〇六頁下段二二行。

(39) 『大正藏』五五卷五六四頁上段八行。

(40) 他の義寂の著作『法華経集驗記』では三友健容稿「寂撰『法華経集驗記』の一考察」（『法華経集驗記』法華仏教文化史論叢、平楽寺書店、二〇〇三年）、高平妙心稿「『法華経集驗記』に関する一考察」（『印度学仏教学研究』五六―二、二〇〇八年）などがある。また逸文研究では八木吳恵稿「古逸書『広章』の復原的操作と恵心教学に於けるその仏教学的意義」（『印度学仏教学研究』八一―、一九六〇年）、森重敬光稿「新羅・義寂の古逸書『大乘義林章』に関する一考察―日本の法相・天台兩宗の引用態度について」（『龍谷大学仏教学研究室年報』八、一九九五年）がある。近年では福士慈穂著『日本仏教各宗の新羅・高麗・李朝仏教認識に関する研究 第一巻 日本天台宗に見られる海東仏教認識』（身延山大学東アジア仏教研究室、二〇一一年）では日本の典籍に引用される新羅・高麗・李朝の著作を蒐集しており、第二巻（日本三論集・法相宗）、第三巻（日本華嚴宗と続刊予定である）で義寂の逸文を確認する上においても有効である。またかつて申賢淑稿（『新羅唯識相乘論―円測の道証、大賢の継承について―』（『印度学仏教学研究』二七―二、一九七九年）におけるような新羅唯識の系譜論も手掛かりとならう。